



「わあ！ ちっちゃなバイオリン！」

マミは思わず手を伸ばした。戸棚の奥に隠すように置いてあった、手のひらサイズの小さなバイオリン。

「本物みたいによくできてる。ねえトラノスケ見て」

お店の看板猫のトラノスケが、ぴくりとひげを動かした。ここはマミのおばあちゃんのアンティークショップだ。

マミはこのごろ学校が終わると、ここに来て茶トラ猫のトラノスケと遊んだり、ガラスケースの中のキラキラしたアークセサリをながめたりして過ごしている。

トラノスケが、すくと床におりて、まわりついてきた。心配そうなトラノスケの緑色の瞳に、マミは現実を引き戻されるような気がした。小学六年生にもなって猫しか話相手がない自分。

魔法のバイオリン

高橋桐矢

絵 ふじのきのみ

「あーあ。猫はいいなあ。あたし、猫になりたい」

ミニバイオリンを指先でつまみ、ヘアピンサイズの小さな弓を当ててみた。

きゅーん。きゅろーん。すきとおった不思議な音が響いた瞬間。世界が真っ白になった。

「マミ！ マミ！」

名前を呼ばれて気づいた。目を開けると、いつのまにか見なれない大きな壁がそびえている。ふらつきながら立ち上がるうとして、ぎよっとした。壁と思ったらのはアンティークショップのレジ台だ。

わけがわからないままその場でグルグル回って、やっと違和感の理由に気づいた。なぜか四本足で歩いている自分。ふわりとした白いつぼ。手は前足になっている。